

里山の活用と共生

里山は人と自然との関わり合いによって形成された環境です。里山の異変により、里山が里山として維持されなくなってきました。里山を活用することで生物の多様性を維持していくことは現代社会においても重要なことです。

従来の考えとこれからの考えの比較

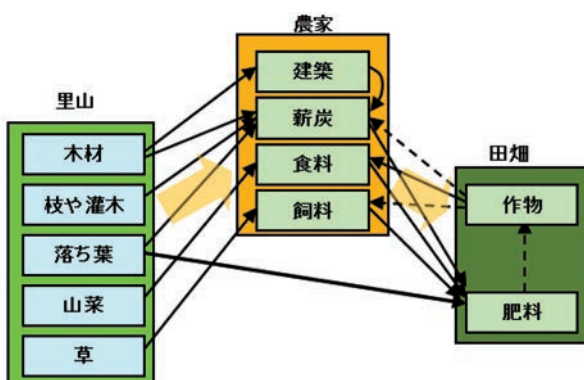
従来

化学肥料や石油、ガスなどの地下資源、電気の使用は生活スタイルを大きく変化させました。肥料や燃料を里山の資源に頼る事がなくなり、里山は生活のための資源供給地としての価値を失いました。そのため里山管理は放棄されました。その結果として

①藪が茂り、マツが枯れ、里山の代表的景観が失われました。②燃料のナラ材が伐採されず、ナラ枯れが進行しました。③放置された竹林が拡大し、生物多様性が失われました。④荒廃した里山地域にイノシシやシカ、サルなどの野生動物が出没するようになりました。

これから：里山に新しい価値を付与して多くの人を訪れる魅力ある里山の形成

実用の可能性



図：里山景観における物質とエネルギーの流れ

かつての里山は農家に多くの資材と食糧や燃料、肥料をもたらしました。ほとんどすべての物質とエネルギーは最終的には田畑に肥料として投入されていました。

農家の生活の変化で里山の物質とエネルギーの活用は大きく変化し、循環が失われました。

燃料としての木炭は右図の林野庁統計のように1960年代から激減して農家のエネルギー源の役割を果たさなくなりました。里山を再生することで新たな価値を創出し里山に活力を取り戻します。

- 1) 観光：里山の景観と自然体験による癒しとリフレッシュ。
- 2) 教育：里山の環境保全と生物多様性を学ぶ。
- 3) 資源利用：エネルギー（木質ペレットなど）の効率的利用

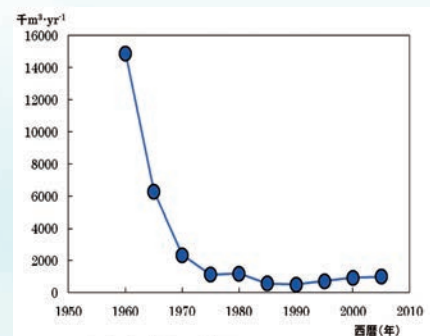


図-5. 木炭生産量の推移
(林野庁統計情報)

<http://www.rinya.maff.go.jp/j/kouhou/toukei/index.html>

実用の裏付

「里山資本主義」のように里山の有効利用の実験が行われています。

詳細はホームページ参照；「里山のチカラ — NHK オンライン」

<http://www.nhk.or.jp/eco-channel/jp/satoyama/interview/motani01.html>

研究者

龍谷大学
理工学部
環境ソリューション工学科

教授 宮浦 富保

森林生態学
造林学
林木育種学

E-mail : miyaura@rins.ryukoku.ac.jp

研究テーマ

- ①樹木の成長と枯死の過程
樹木の機能量（枯死速度、純生産速度）の実測に基づき成長曲線を定式化するとともに、自然間引きに伴う森林の構造の変化を明らかにします。
- ②樹木の遺伝的な特性
樹木の成長に対する環境要因と遺伝要因を解明し林業への応用法を提案します。
- ③里山の生態学的プロセス
森林の更新や成長過程に及ぼす人間活動の影響を評価し、生活環境の近くにある森林（里山等）の保全方法を提案します。

問い合わせ先

龍谷大学 龍谷エクステンションセンター(REC)
〒520-2194 滋賀県大津市瀬田大江町横谷1番5
代表TEL:077-544-7299 FAX:077-543-7771 Email:rec@ad.ryukoku.ac.jp